
魔法少女リリカルなのは 星屑の魔導書

みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 星屑の魔導書

【Nコード】

N2218M

【作者名】

みずき

【あらすじ】

イレギュラーを排除してください。

一冊の魔導書に唐突に喚びだされ戦いに身を投じる少年の物語です。向かう先はリリカルでまじかるな世界、少年がその世界で出会ったのは…

主人公はシヨタで最強系、チート能力持ちなので苦手な人はリタインしてください。

基本シヨタが多くボーイズラブ要素ありです。

とあるサイトに投稿中の小説を設定を少し変えて書いてます。
そちらも投稿者名もみずきです。

星屑の魔導書（前書き）

不慣れなので時間がかかりそうですが頑張ります。

星屑の魔導書

僕は今不思議な空間にいる。

唐突に何の前触れもなく、気がついた時には僕の周りは、周囲に何もなかったキラキラと光が降り注ぐこの不思議な空間に変わっていた。

とりあえず基本的な情報を思い出してみることにした。

僕の名前は芹沢瞬兵、僕は公園で遊んでいたはずだ。

同い年の子に比べて大人っぽい頭が異常に良いとよく言われる四歳の男の子だ。

「……本当に此处は何処？」

ずいぶん落ち着いてるって？

ただ単に情報処理能力を大幅にぶち抜いた現象についていけないだけだ。

僕一人だという事態を理解し僕はうつむいて泣きそうになった。
泣き出さなかったのは男の子の意地だ。

『見つけた』

聞こえた声に視線をあげるといつの間にか目の前に一冊の本があった。

「本が…浮いてる？」

本はとても立派で分厚い物で表紙に精巧な細工がしてあった。

『初めまして私は星屑の魔導書、滅びた世界や星の欠片が形を為した物です』

「星屑の…魔導書…？」

『はい』

「それで、僕に何の用」

僕はとまいどいながらも冷静に返事を返す。

『私に力を貸してください。滅びを呼ぶイレギュラーを倒す為に』
「とりあえず詳しく聞かせてください」

詳しく話を聞くと星屑の魔導書はただ滅びた世界ではなく外部からのイレギュラーによる干渉で滅びた世界の集まりらしい。

故にイレギュラーの干渉で滅ぼうとしている世界を護りたいらしい。

今の姿はとある世界のデバイスというものを参考に構築したらしい。

そして力を貸すには僕が魔導書の主として契約しなければならない。その際に僕は不老不死になり同時ありとあらゆる世界の技術を使えるようになるらしい。

例えば忍術や魔法などだ。ただ不老不死と行っても正確には死んでも時間をかければ蘇れる…と言う事らしい。

場合によつては百年以上かかるらしい。

らしいばかりだが仕方がない。

「大体の事は分かったよ。僕が拒否したらどうなるの？」

『元の世界に戻します。けれど私を扱えるのは貴方だけなのです』

「どうして？」

『貴方が始まりだからです』

「始まり…？」

『創造主の親、世界や全ての力源、それが貴方の背負った運命です。ここで断つてもいつか必ず貴方は騒動に巻き込まれます』

「よく分からないけど…いいよ。僕で役にたつなら」『本当にいいのですか？』

泣きそうな声…君は優しいんだね。

「うん…君の想いが伝わってくるから、僕は瞬兵、芹沢瞬兵、君は」
『私の名は主様が決めてください』

「…じゃあ、君の名前はシュテルシア」
『シュテルシア…ありがとうございます』

本当に嬉しそうな声、名前を着けたかいがあるよ。 フィーリン
グ思いついただけというのは秘密にしておこう。

『では、参りましょう主様』
「そうだね」

僕は魔導書を手に取る。
その瞬間に光が僕達を包んだ。

瞬兵「芹沢瞬兵くんのあとがきコーナー、みなさん初めまして芹沢瞬兵です。ここは色々なキャラクターとの雑談や質問何かに応えるコーナーです。本格的なのは一話からになります。みなさま今後ともよろしく願いします!!」

いきなりバトル！？まだ何も教わってないんですけど（前書き）

第一話 まだまだ短いです。
もう少し長くしたいな。

いきなりバトル！？まだ何も教わってないんですけど

着いた場所は夜の街だ。

「着いたの？」

『はい、此処は他世界においてリリカルなのはと呼ばれる世界です。私の形状の参考にした世界でもあります』

「そっか、それじゃあまず…」

『警告、前方より魔力反応が近づいて来ます！』

「…え？」

『来ます！！』

シュテルシアの警告に僕は視線を前に向ける。

そこに現われたのは大きな犬だった。

大きさは大体、家一軒ぐらいだ。

そして当たり前のように襲い掛かって来た。

「わわわっ」

飛び掛かって来た犬を横に飛び退いてかわす。

「何あれ…というか何あの大きさ！？」

『おそらくジュエルシードの影響です』

「何それ！？」

『また来ます！！』

「な！？」

犬が襲い掛かってくるが反応が追い付かない！

僕はおもわず目をつぶってしまった。

衝撃はなかった暫くして恐る恐る目を開くと僕は空を飛んでいた。

「え…あれ、何がどうなったの？」

犬は此方を見上げて低く唸っている。

『テレポートとサイコネシスですね』

「それって魔法？」

『いえ、超能力の類いです』

「どうすればいいの？」

『ジューエルシードを封印します。私を開いてください』
「分かった」

僕はシュテルシアを胸の前で開く。
それ同時に犬に羽が生えてって…

「羽えっ！？」

『主様集中してバインドを！？』

「え、あ、うん…縛れ光の鎖よ！」

僕の足元に魔法陣が描かれる。

「プリズムチェーン！！」

犬の周りに現れた魔法陣から光の鎖が伸びて飛び立とうとした犬に絡み付き縛り上げる。

『今です。封印を！！』

「その力の全てで猛き力を封じよ！走れ魔法陣！輝け僕のティンクル・スター！！」

今一度犬の周りに描かれた魔法陣が輝き増し消えた。後に残ったのは一匹の小犬と青い宝石だった。

「ふう、なんとかなった」『騒ぎになる前にジュエルシードを回収してこの場を去りましょう』

「そうだね」

僕は青い宝石を引っ掴み駆け出した。

瞬兵「芹沢瞬兵のあとがきコーナー！ゲストは星屑の魔導書シュテルシアです」シュテルシア（以下シュ）『みなさま初めまして主様のデバイス、シュテルシアです』

瞬兵「それで星屑の魔導書に付いてちよつと説明してくれる？」

シュ『はい、星屑の魔導書は滅びた世界や星の残骸が集まり生まれた魔導書です。星屑は其処から付けられました』

瞬兵「その目的は？」

シュ『滅びを回避することです。ただしイレギュラーが関わって居ればですが、冷たいようですがそれ以外は自業自得なので仕方ありません』

瞬兵「無差別に何でもかんでも助ける訳じゃないってことだね」

シュ『そうです』

瞬兵「僕って何ができるのかな？」

シュ『基本的になんでも、始まりの力を開放すればありとあらゆるものを吸収したり全ての魔眼を自由に使えるようになります。目的は滅びの回避なので極端な話、原作主人公を殺そうが、死ぬはずの人

を助けようが、死んでる者を蘇らせようが、滅びさえ回避すればいいんです」

瞬兵「僕って四歳児にはあり得ない思考回路してるのは何で？」

シュ「プロローグのあの不思議空間で私とリンクしたからです。とはいえ思考は大人に近くても実際の知識や知恵が増えたわけではないので要勉強です」

瞬兵「魔法を使いこなす為に特訓もしないとね」

シュ「課題は多いですが主様なら大丈夫です」

瞬兵「現状での僕のステータスを紹介します」

名前、 芹沢瞬兵

容姿、 ツンツンした栗色の髪に黒い瞳、 白い半ズボンに白と青のTシャツに赤いジャンパー

体力、 一般人の大人程度（年齢から考えれば破格）

魔力、

白兵、 武術経験なし

魔法構築、 素人

瞬兵「まだまだ弱いよね。本当に頑張らないと」

シュ「大丈夫です。私が全力でサポートします」

瞬兵「ありがとう、シュテルシア」

二人「『それではみなさままたお会いしましょう。さようなら』」

守護騎士召喚！！何故か男の子ばかり（前書き）

第三話です。

書いたのを2回も間違えて消すという大失敗をして疲れました。

守護騎士召喚！！何故か男の子ばかり

その後、僕は何度か警官に追い掛けられたがレポートを駆使して何とか逃げ延びたのだった。

『主様、もう大丈夫なようです』

「はあ、はあ、はあ……ああそう」

『随分とお疲れですね。これは要訓練ですね』

「あのね。僕は四歳何だよ。あれだけ走ってレポート使えば疲れるに決まってるでしょっ！」

僕は思わず怒鳴り付けた。

『そういえばそうでしたね。申し訳ありません』

「それで僕たちの戸籍とかどうなって……って何で僕、戸籍なんて言葉を知ってるの？」

『それは私が与えました』

……人間だったらきつとえへんと胸を張っているところだろう。

「でもさあ。これって洗脳って言わない？」

僕はジト目でシュテルシアを見つめる。

シュテルシアはダラダラと冷や汗を……って何で本が冷や汗？

『知識を与えただけです。可笑しいことはしていません』

「本当に？嘘だったら……酷いよ」

『な、何でも教えてないのにそんなバカ魔力が集まってるんですか！？』

周囲と自分の中から強い力を感じる。

これが魔力なんだ。

今まで気がつかなかったのが心底不思議だ。

「えい」

そんな掛け声と共に僕は集まった力を打ち出した。
もちろんシュテルシアに向けてだ。

ずござおおおおおんっ！！

『ぎにゃあああああああーっ！？』

瞬間に轟音と共に撃ちだされた虹色の光の奔流が奇声を上げたシュテルシアを飲み込んだ。

「…………えと…とりあえず…逃げよ」

僕は地面に落ちたシュテルシアを引っ掴みテレポートして其処から離れた。

「驚いた。まさかあんな事になるなんて」

『いきなり何するんですかぁ！！』

「あ、起きた」

『主様は私が嫌いなんですか……………うっう』

「そんなことないよ。ちょっと試したかっただけ…ちょうどいい的…いやいや標て…いやいや練習だ…と、とにかく嫌って何かいないよ。あ、でも今度人の頭に何かしたら」

『二度と致しません！！』

人間だったらきつと土下座してるところ。

『所で此処は？』

「森」

そう、僕たちは今、森の中に居る。

レポートしたら此処に着いたんだけど、夜だからちょっと怖いです。

「さて、仕切りなおしね。僕たちの戸籍とかはどうなるの？」

『その前に守護騎士を召喚しましょう』

「どうやって？」

『少々お待ちください……主様との相性チェック完了…欠片より的人格呼び出し…守護騎士四名選別完了…ユニゾンデバイス人格選別完了…主様、守護騎士を呼んでください』

「へ？…え、えと、呼び掛けに応えて来たれ、僕の騎士たち」

唱え終わるとシュテルシアが開き輝き出す。

光りが消えると五人の人が……一人は妖精サイズだけど…現れた。

「我ら」

「滅びし世界の意志」

「星屑の騎士」

「主の呼び掛けに応じ」

「参上しました」

僕の前に跪くのは五人の少年たちだ。

「僕は星屑の騎士、スターダストナイツ、雷神の将、フェイ・エレクトラ、よろしく願います。我が主」

まず自己紹介してきたのはサラサラの短い金髪で青い瞳の十四歳くらいの少年、服装はファンタジーの鎧を着てない騎士といったところ

るか…背中に剣を背負っている。

「僕はスターダストナイツ、風神の忍、嵐王丸、らんおうがんよろしく願います。主殿」

次はやっぱりサラサラの茶色の髪に薄い黄色の瞳に青い忍者服に鎖帷子を来て鎖ガマをもつ、七、八歳くらいの男の子だ。

「俺はスターダストナイツ、水神の騎士、レオスルート・グリーンフィールド、よろしく頼む。主」

三人目はツンツンした短い青い髪に青い瞳の十七歳くらいの少年、服装は袖のない白のロングコートに黒の長ズボン、腰に剣をさして軽装の鎧を纏っている。

「僕はスターダストナイツ、炎神の狙撃手、宮沢大山だよ。よろしく。主様」

またまたサラサラの短い焦げ茶色の髪に緑の瞳の十八歳くらいの少年、服装はブレザーの学生服にスナイパーライフル……何故に学生服？というか大山って名前なんだね。

「僕はスターダストナイツ、ユニゾンデバイス、トアラ・クルセルです。よろしく願います。マイロード」

最後は少し跳ねた緑の髪に青い瞳の妖精サイズの男の子だ。

「僕の名前は芹沢瞬兵、よろしくね。主なんて堅苦しい呼び方はしなくていいよ。シュテルシアもね」

『ではせめてマスターで』

「まあ・・・いいか」

「では、僕は瞬兵くんと呼ばせてもらいます」

「ぼ、僕は瞬様と」

「俺は瞬兵だな」

「僕は瞬兵様で」

「僕はロードかな」

結果シュテルシアはマスター、フェイくんは瞬兵くん、丸くんは瞬様、レオスくんは瞬兵、大山くんは瞬兵様、トアラくんはロードとなった。

「ところで何で名前とかそんなに違うの？」

『数多の世界の欠片から最もマスターと相性の良い者たちを選びましたから、住んでいた世界が全員違いますから（身体の相性もバツチリです。それにマスターの近くに女は私だけでいいのです）』

何かシュテルシアが変なこと考えてる気がする。

「ま、とにかくみんなこれからよろしく」

「『『『『』はいっ！』』』』』」

瞬兵「芹沢瞬兵くんのあとがきコーナー！」

フェイ『今回は僕、雷神の将、フェイ・エレクトラが相方を務めさせてもらいます』

瞬兵「話がちつとも進まない」

フェイ『作者さんが一度書いたの間違って消してしまったそうです』

瞬兵「気の毒に…始めから書き直したんだ」

フェイ『そうらしいです』

瞬兵「でもさ、それって自業自得で言い訳だよね」

フェイ『瞬兵くん？』

瞬兵「ちよつとおはなしに行つて来る」

フェイ『行つちやいました……ええとみなさま次回読んでください
お願いします……遠くから断末魔の叫びが…合掌』

白い魔王との出会い・・・それで君は誰？（前書き）

三話です。

原作キャラがいよいよ登場です。

白い魔王との出会い・・・それで君は誰？

僕がこの世界に来て四日、どこぞの世界のメタルアルケミストの錬金術で家を勝手に建てて認識阻害の魔法をかけて暮らしています。ちなみに戸籍はシュテルシアをモードチェンジしてパソコンにした後にトアラくんがハッキングして作り、基本資金は錬金の魔法で宝石を作って売った。

犯罪だろって？背に腹は変えられないんだよ。

現在家に居るのは僕、フェイクくん、丸くん、トアラくん、シュテルシアだ。

レオスくんと大山くんは現在はお金稼ぎ（お仕事）中だ。

この世界で働けそうなのは二人だけだからね。

あ、もちろん服はちゃんと着替えたよ。

あの服はこの世界で言うバリアジャケットと同じなんだそうだ。

「なるほど、フェイクくとレオスくんはゲーム的に言うと前衛形、丸くんは中衛支援型、大山くんは後衛支援型、トアラくんは後衛攻撃型か」

『とはいえあの人達は本来の世界では英雄とか勇者とか呼ばれるほどの実力者なのでどんなポジションでも確実にこなせますよ。元々魔法文化の存在する世界から選別したので魔法に関しても問題ありませんし』

「つまり、今一番弱いのは僕って事か・・・まあ距離とってシュテルシアに撃ったの撃てば勝てるかもしれないけど接近戦が・・・この体格じゃさすがに不利すぎるよね」

『そうですね。まずは魔法を使いこなすのが先でしょう。そもそもマスター魔力は短所を補って余りあるのですから』

「そうだね。まあ護身術くらいは教わって先に魔法の勉強優先させよう」

というわけで、だいたい魔法の勉強中……とはいえ僕の場合、力の流れが分かるのでそんなに苦労はしてない。

なんとなくこう動かせばこうなる。

ああ動かせばああなるって分かるからね。

「そういえば……魔法の勉強ばかりしてたけどこっつてどんな世界なの？」

『そうですね。では、ダイジェストで、この世界の辿る一つの道を見せましょうか、目を閉じてください』

言われたとおりに目を閉じると映像が浮かんできた。

僕は暫くそれを眺め。

映像が終わった。

「ふむ、高町なのは、フェイト・テストロツサ、ジュエルシード、八神はやて、闇の書、機動六課、レリック、ヴィヴィオ、聖王と霸王、トーマ・アヴェニール、エクリプス、時空管理局か中々に面倒くさそうな世界だね・・・将来の金色の死神に管理局の白い魔王の出会いの事件って事か・・・それにしてもスターライトブレイカー、収束砲か・・・もっと強いのは作る」

[illegible]

撃はイヤ砲撃はイヤ砲撃はイヤ」

シュテルシアがぶつぶつと呟きガタガタと震えだした。

- ・
- ・
- ・

鬱陶しい。

初日のアレが相当に効いたらしい。

[illegible]

ぷ
ち
ん
・
・
・

「ふんふん」

ばーん！

「わきやああああーっ！！」

僕は魔力で身体強化してシュテルシアを殴りつけた。

シュテルシアは家の天井をぶち破って空に消えていった。

空の彼方がキラーンって光ったし……ああ、すっきりした。

とりあえず天井を直さないと両手をパンと合わせて家に両手をつける。

バチバチと青白い光を放ち穴が修復された。

「瞬兵くん、昼食が出来ましたよ」

「ん、ありがとうフェイクくん」

「シュテルシア、また何かしたんですか？」

「ちよつと、うるさかったから・・・」

家の台所から焼きそばを持ったフェイクくんが出てきた。

焼きそばをテーブルに置きながら聞いてきたから応える。

「そ・・・そうですか・・・」

フェイクくん、表情が引きつってるよ。

僕は椅子を引いて座・・・すわ・・・す・・・高いし・・・もつと低い椅子とテーブルにするべきだった。

そんなフェイクくんは僕を見て笑い名から抱き上げ椅子に座らせてくれた。

「ありがと・・・ねえ、丸くとトアラくんは？」

「丸は外で警備と周囲の探索をしていてトアラはパソコンで株を・・・」

「そう・・・食事は一緒にいいけど忙しいんじゃないよね」

仕方ないとはいえ寂しいなあ・・・

「夕飯にははみんな間に合いますよ。元気だしてください」

『そうです。私も居ますししっかり食べて頑張りましょう』
「ありがとう」

笑顔で告げるとフェイクくんを赤くし、いつの間にか戻ってきたシュテルシアはなんかピンクなオーラ流してきた。

何なんだろうねこの本は・・・？

「「いただきます！」」

『私は食べられないのが残念です』

「ところで魔法の勉強は上手く言っていますか？」

食べ初めて暫くするとフェイクくんがそう聞いてきた。

「まあ、殆どの魔法は覚えたよ。後は実戦あるのみかな」

『午後は結界を張って実技に入りますよ』

「何か手伝いますか？」

「大丈夫だよ・・・まだ加減とかわかんないしとりあえず使ってみてからだね」

「僕も買い物に行くので付いていきますから少し待っていてください」
「分かった」

食後、少しの休憩の後に僕達は家を出る。

さてとどこか広い所に行こう。

「瞬様、お出かけですか？」

「あ、丸くん、魔法の練習ができそうな場所を探そうかと・・・」

「それなら僕もお供します」

「じゃあ、行こうか」

「「はい！」」

そして現在、僕はフェイクくんを抱っこされている。

何故かって？・・・誘拐されそうになったからだよ。

それもハアハア言ってる気持ち悪いおっさんに・・・うつ、思い出しただけでも気持ち悪い。

まあ、そんな些細な事は置いといてだ。

「スターライトバスター」

空に向けた掌から虹色の砲撃が打ち出される。
もちろん結界を張ってるよ。

「うん、上手くいった。次はプリズミック・スフィア」

僕の周りに色とりどりのスフィアが現れる数はとりあえず二十個だ。

「シュート」

砲撃と同じように空へと打ち出した。

「次は・・・降り注げ光の欠片よ」

片手を空に向け空を埋め尽くすかのように次々とスフィアを作り出す。

「ヘブンズフォール」

手を振り下ろしてスフィア打ち出した。

「・・・・・・凄い・・・丸、あれ避けられるか？」

「避け切れません。あんな数、物理的に無理です」

「でも、足を止めたら一点集中で降ってくる」

「防御魔法もあれだけの数の前じゃ意味ないですよね」

「「（お、恐ろしい・・・）」」

『さすがマスター、デバイスを使わないのにすばらしい力です』
「狂気と強欲の水流、旋嵐の如く逆巻く！タイダルウェイブ！」

僕を中心に現れた水流が周囲をなぎ払った。

「ふふん、いい感じ、いい感じ・・・」

「瞬兵くんそろそろ帰ろう」

「フェイクくん？まだいいじゃない」

僕を抱いたままのフェイクくんを見上げる。

「あの、瞬様・・・これ・・・」

「・・・もう、そんな時間？分かった帰ろ」

丸くんの方に視線を下ろすと申し訳なさそうに見上げて時計を見せ
てくる。

・・・どんだけ夢中になってたんだ僕は・・・それにしても何か可
愛いぞ丸くん・・・見下ろせるのは抱っこされてるからなんだけど・
・

「じゃ、結界解除・・・ジュエルシードの気配？」

結界を解除するのとはほぼ同時にジュエルシードの気配を感じた。

「フェイクくん、丸くん」

「「はいっ」「」

「行くよ！」

「「承知しました」「」

僕はフェイクくんから離れてホウキを取り出す。
どこに持っていたかって、空間の狭間にだよ。
僕はこれを次元の蔵と呼んでいる。

物が腐らないから冷蔵庫要らずさ。

まあとにかく取り出したホウキに座り空へと飛び上がる。

二人もそれに続いて飛び上がる。

認識障害がかかっているので外から見られることはない。

そのまま気配のする方に一直線に飛び気配に近づいた瞬間にピンク色の光と白い光が光った。

「・・・あれは・・・高町なのは・・・か」

「もう一人居るよ。確かここでは高町さん普通はだけのはずなんだけど」

「・・・・・・・・」

フェイクくんは首を捻り、丸くんは無言で警戒してる。

「丸くん、姿を隠して、見つからないように監視」

「はい」

丸くんは直ぐに姿を消す。

さすが忍、気配も魔力反応も完全に消えてる。

「フェイクくん、先に帰ってて、手札は出来る限り隠したい」

「分かりました」

フェイクくんもこの場を放れて行った。

何もなければ助ける必要もないけど・・・樂觀的かな・・・それにしてもさすがイレギュラーというべきか（僕もイレギュラーなんだけど）魔力量は凄いな・・・けど何だろうこの不安は・・・

白い魔力光がジュエルシードの怪物、黒くて丸いものを吹き飛ばし高町なのはがジュエルシードを封印しようとするが・・・あれって・

・転移術式と攻勢術式、爆発で視界を乱して逃げるつもりか・・・
逃がすわけには行かない・・・仕方ない。

認識阻害の魔法を消して、僕は一気に戦場へと突き進む。

「シーリングバインド!!」

虹色の輪が怪物を縛りつけ同時に展開された術式が消えた。

「え、えっ!?!」

「な、魔導師!?!」

「この二人以上の魔力だなんてそんな事が・・・?」

「その力の全てで猛き力を封じよ!走れ魔法陣!輝け僕のティンクル・スター!!」

三人・・・いや二人と一匹?の驚きを無視してジュエルシールドを封印した。

side out

??? side

僕は高町このは、なのはの歳＋十六歳の所謂転生者という奴だ。

僕は元の世界で神様のミスとやらで死んだ。

今はなのはと同じ年の男の子で高町家の養子、神様に謝り倒されたあげくに望みもしないチート能力を与えられ望みもしない転生をした。

しちやたものは仕方ないから頑張って生きてるけどね。

そして僕の知る原作通りに事件は起こった神様の修正力でユーノはデバイスを二つ持っていて僕のはレイシングハートの双子杖のシャイニングハートというらしい。

何が楽しみにしておれじゃ、あのジジイ、作りの基本はレイシングハートとほぼ同じで色は対照的に青と銀が使われている。

ちなみに僕のバリアジャケットは薄手のシャツとズボンの上に灰色のロングコートだ。

「へ、変身しちゃった!？」

「なのは、来るよ!」

「え、きゃあっ!」

『プロテクション』

飛び掛ってきた黒い化物をレイシングハートが障壁をはり弾き飛ばした。

「シャイン・バスター!」

僕は砲撃を打ち出し化物を吹き飛ばした。

「今だ、封印を!」

「え……あ……」

「ユーノ、あいつが魔法を使うぞ!？」

「そんな馬鹿な!？」

何だ、何であいつが魔法を使うんだ？

攻撃魔法なのか？

魔法が発動しようとした瞬間に僕たちの目の前にホウキの子供が現れた・・・ってホウキ!？

「シーリングバインド!!」

子供が術を唱えると虹色の輪が怪物を縛りつけ展開された術式を消し去った。

「え、えっ!？」

「な、魔導師!？」

「この二人以上の魔力だなんてそんな事が・・・?」

「その力の全てで猛き力を封じよ! 走れ魔法陣! 輝け僕のティンクル・スター!!」

子供はあっさりとジュエルシードを封印してそれを手に取った。

そしてこちらへと顔を向けた。

衝撃が走った気がした。

僕は生まれた初めて人を美しいと可愛いと思った。

他の二人も顔を真っ赤にしているところを見ると同じなのだろう。

「大丈夫ですか？」

ああ、声も可愛い・・・

s i d e o u t

瞬兵 s i d e

「大丈夫ですか？」

声をかけたけど三人は顔を真つ赤にしてまったく反応しない。
すると遠くからサイレンの音が聞こえてきた。
仕方ないので僕は三人を引っつかみテレポートした。

「ここは・・・公園？」

「いつまでもあそこに居るわけには行かないでしょ、お互いに」

「あ、助けてくれてありがとうなの、私、高町なのは」

「僕は高町このは」

「僕はユーノ・スクライア」

「・・・よろしく」

「僕は芹沢瞬兵だよ。よろしくね。えと」

「私はなのはでいいの」

「僕もこのはで」

「わかった。なのはお姉ちゃん、このはお兄ちゃん、ユーノお兄ちゃん」

「・・・はっ」「」

「わ、私、もう死んでもいいかも」
「僕も」

・・・何なんだろうこの人たちはいいや、帰ろう。

「もう遅いから僕帰るね。バイバイ、お姉ちゃん、お兄ちゃん」
「へ?・・・あ、バイバイ」

僕はホウキに乗って飛び上がり即座に認識障害の魔法を使った。

「可愛かった(の)」

「つて、ああーっ!？」

「うわわ、な、何!？」

「うるさいぞ、フェレット」

「ジュエルシード、返してもらってない!？」

「しまった」

「え」と、どういうこと?」

反応を見ると高町このははジュエルシードの事を知っているようだけど・・・ごめんね。

後でちゃんと返すから、少し調べさせてね。

瞬兵「芹沢瞬兵のあとがきコーナー、今回のゲストは」

丸「僕、嵐王丸です。よろしく願いします」

瞬兵「やっとな原作キャラと絡めたね」

丸「またオリキャラ増えてますけどね」

瞬兵「そうだね。收拾つくのかな？」

丸「どうなりますかね」

瞬兵「レオスくんや大山くんも出したらしいけどこの世界ではお金を稼いでもらわないといけないから子供達の時間にさせないらしいです」

丸「トアラも大きく変身しないと外を出歩けないですしね」

瞬兵「魔法なしの世界は制限がキツイよね」

丸「さてさて今回出てきた魔法の説明です」

瞬兵「まずスターライトバスターは砲撃魔法、さすがにSLBほどの威力はないけどデイルバインよりもかなり強いです」

丸「プリズミックスフィアは誘導弾と射撃の両方を兼用しています」

瞬兵「ヘブンスフォールは空一面にプリズミックスフィアを配置し一斉に打ち出す。その様は空でも堕ちてきているかのように見えるそうです」

丸「そろそろ、訓練の時間ですので行きましょう瞬様」

瞬兵「そうだね。ではみなさま、また次回に」

二人「さようなら」

撃ちぬけ巨大樹!!……これって僕がやっていいのかな? (前書き)

時間がかかって本当に申し訳ありません。
第五話です。

撃ちぬけ巨大樹！……これって僕がやっていいのかな？

「トアラくん、ジュエルシードのこと何か分かった？」

「それが、どうやらジュエルシードの中に何かが居る……いえ、閉じ込められているみたいです」

トアラくんはシュテルシアのパソコンモードを使い手に入れたジュエルシードを解析している。

「閉じ込められている……かそれって引っ張りだせるの？」

「難しいですね。中に居る者はどうやらジュエルシードに分割されて閉じ込められてます」

「つまり、ジュエルシードを全部集めないといけないってことなんだね」

「そうです」

なるほどね。

とはいえ閉じ込められている者が善いものとは限らない。

「前回や前々回の魔法や羽は其れの仕業？」

「だと思えます。それにしても分割されてなおこれだけの魔力があるなんて……」

「閉じ込められているのは人じゃなさそうだね」

「そうですね」

どうしよう、引っ張りだしてケンカ売られても面倒だしなあ……
とりあえず解放するかしないかは保留しておくことにしよう。
このまま管理局に渡すわけにはいかないのは決定事項かな……

「今のところイレギュラーは三つ、僕達、高町このは、そしてジュエルシードの前身……ここまで明確に違うと誰かが干渉してる可能性も高くなっただね」

「どうします？高町このは（イレギュラー）を排除しに行きますか？」

「今は様子見かな、でも、あの子は悪い子じゃないと思う」「そうですね」

そんはあからさまにホツとした顔しなくても……

例えばイレギュラーでも何もしてない者を傷つけるのはさすがにしないらしい、世界に仇なすイレギュラーの排除が星屑の魔導書の目的、つまり今はまだ高町このはは敵ではない。

とはいえこの先もそうである保証はない。

丸くんの調査結果次第なんだけど、戦わないですめばそれが一番なんだけど……

「じゃ、僕は出かけるよ。もう少し町の中を見ておかないと」

「僕はこのまま解析を続けます。もう暫くシュテルシアを貸してください」

「分かった」

「それと一人で出かけないでください」

「分かった」

まあ、誘拐されかけたんだから仕方ないけど……過保護共め……

「フエイくん、偵察に行こう」

作業部屋（トアラ私室）から出た僕はリビングに居たフエイくんに声をかけた。

「了解しました」

フェイクくんはそう言っ僕を抱き上げようと近づいて来る。

「ねえ、いい加減止めない。フェイクくんだって重いでしょ？」

「軽いですよ。それにまた誘拐されそうになっても困りますから」

「それは…そうなんだけど…」

あの誘拐未遂の一件から僕は一人で外を歩けなくなった。

というか外に出るときは常に抱っこされている。

僕は子供かったの……いや、子供なんだけどね。

シテルシアの所為で子供らしさがどっかいつちゃったから、僕自身は酷く不本意な状況だ。

「分かったよ」

フェイクくんは笑ってるんだけど無言の圧力が怖い。

僕はため息を一つついてその行動を甘受した。

外に出て暫く歩くと……歩いてるのはフェイクくんだけ……それは置いて、とにかく、小学生のサッカーチームが試合をしている所を通りかかった。

「あ…高町なのはに高町このはだ…」

「挨拶していきますか？」

「そうしようかな」

「僕はどうします？」

「帰ってでいいよ」

「分かりました。監視対象がいるから丸も近くにいますから、先に帰りますね」

「そうだ…トアラくんにお土産でも買ってつてあげて」

「ここのところずっとジュエルシードの解析してますからね。分かりました」

フエイくんの腕から飛び降りる。

「それじゃ、お願いね」

「分かりました」

フエイくんが帰るのを見届けてから僕は意識を切り替えた。

「こんにちは、なのはお姉ちゃん」

「え？あれ、瞬兵くん？」

もの凄く驚いてる。

そりやそうか、この子は僕が魔法使ってる所を見てるわけだし…そんな子供が声をかけてくれば普通は驚く。

「うん、こんにちは」

「あ、こんにちは」

頭がついてきてないみたい。高町なのは、その顔はちょっと間抜けだよ。

「サッカーの応援？」

「そうだよ。翠屋FCお父さんが監督をやってるチームなんだ」

「ふうん、そうなんだ」

「なのは、知り合いなの？」

「可愛い子だね」

「あ、うん」

「なのはお姉ちゃんのお友達？えと僕は芹沢瞬兵です。よろしくお

願います」

僕は笑顔でぺこりと頭を下げる。

「あ、あたしはアリサ・バニングスよ」

「私は月村すずか、よろしくね」

金髪の子がアリサで紫がかった髪の子がすずかしい。

「よろしくね。アリサお姉ちゃん、すずかお姉ちゃん」

「……なのは、お持ち帰りしていいかしら」

「アリサちゃん!？」

「私もお持ち帰りしたいな」

「すずかちゃん!？二人共正気に戻って〜っ!」

「え？あれ、あたしは今何を」

「可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い」

怖っ、あまりの怖さに僕は高町なのはの後ろに隠れる。

そこ!!

盾にしたと言わない!!

や、実際盾にしたんだけど、そこはつつこんじゃダメなの!!

「すずかちゃん!!」

「あ…大丈夫だよ。うん、もう平気」

「あの、大丈夫？」

なのはを盾にしたまま顔だけだして声をかける。

「大丈夫よ(だよ)」

二人して優しい笑顔だけど……うん、無駄、危険な光を目に宿したあの表情を見た後だから何をどうしても取り繕えない。

「このはお兄ちゃんは試合にでてるんだね」

フィールドを走る高町このはは結構上手だ。

「このはお兄ちゃん、頑張れー!!」

おお!? 視線が僕に集中した………なんでだ?

こののは動きは目に見えて良くなったけど……

「ねえ、なのはお姉ちゃん、僕、何か変なことしたかな?」

「そういうわけじゃないよ。…でも、声だして応援するのは止めた方がいいの」「??? よくわかんないけど、分かった」

おかしいなあ、ただ応援ただけでなんで視線が集中するのかな?

ぴぴーっ!

そんな事を考えていると突然ホイッスルが鳴った。

「ホイッスル? 試合終わったの?」

「違うよ。怪我人みたい」

ホイッスルの意味をなのはに聞くと予想と外れた答えが返って来た。

「怪我人?」

「結構派手に転んでたわよ。見てなかったの?」

アリサちゃんは不思議そうに僕を見る。

「ちょっと考え事してたから」

「でもチームの人達、何だか様子がおかしいね。ちょっと見に行っ

てみましようか」

すずかちゃんの提案で僕達は様子を見に行くことにした。
え？なんでなのはだけ呼び捨てかって？

まだ味方と決まった訳じゃないからだよ。

「お父さん！」

「なのは」

なのはが声をかけたのは若い男性：なんだけど、お父さん？
若いお父さんだね。

「何かあったの？」

「足首を捻っいたらしく動けないんだ。今日は変わりの選手もいない」

「ちょっと診せてください」

「君は？」

「とりあえずこつちが先です」

僕は座り込んでいる選手の足に手を伸ばす。

「んー、骨に異常はないですね。本当に捻っただけみたいです」

言いつつ僕はハンカチを取出し破いで応急処置で足首に巻き付ける。

「でも、動いちゃダメです」

「そうか：仕方ないな」

「僕でよければフィールドに立つくらいならしますけど？」

「気持ちには有難いがどうみても小学校にも上がってない子に頼むことは出来ない」

「まあ、普通はそうですよね」

とはいえ困っている人を見捨てるのもね。
手札は隠して置きたいけど…
それは人助けをしない理由にはならない。

「しょうがないね。丸くん」

「はい」

呼び掛けると即答の勢いで返事が返って来た。

突然現れたように見える丸くんにみんな驚いてるけどそれはさらつとスルーしておくことにする。

「丸くん、お願いできる？」

「瞬様の願いですから任せてください」

「ということですから…ええと」

「あ、ああ…なのはの父親の高町士郎だ」

「士郎さん、僕は芹沢瞬兵、なのはお姉ちゃんこのはお兄ちゃんの知り合いです」

知り合いつて言葉になのはとこのははショックを受けて蹲っての字書いてるけどそれも無視しておくことにする。

現状は敵対してないだけで決してお友達じゃない。

「こちらはお友達兼家族の嵐王丸くんです」

「よろしく願います。士郎殿」

「よろしく、だがいいのかい？」

「フィールドに立って多少動くだけです。ボールには触りません。それでも良ければ」

そりゃそうだ。

忍びである丸くんがそのつもりで動けば普通の子供に止める事なんて出来ない。

触れることは不可能だ。

「ああ、それで構わない」

その後、試合は言うまでもなく高町FCの勝利で終わった。

約束通りに丸くんはボールに触らずに動いて相手を攪乱しその隙にこのはがゴールを決めていた。

「どうもありがとう、助かったよ丸くん」

「礼には及びません、瞬様がそう望んだから手伝ったまでです」

丸くんは無表情だ。

愛想がないよ。

「ねえ、瞬兵くん」

「なに、なのはお姉ちゃん？」

丸くんと土郎さんのそんな会話を余所になのはが声をかけて来た。

「これからみんなで家のお店でケーキ食べるんだけど、瞬兵くんも行かない？」「すみません。用事があるから、僕はもう帰ります」

「そっか、残念…ねえ、近いうちに話をしたいんだ」

「……分かりました。今度、暇な時に会いに来ます」「ありがとう」

僕はなのはに手を振りながらその場を後にした。

向こうから仕掛けて来たか、まあ、いつまでもこの状況でいい分けないしね。

「とりあえず丸くん」

「はい」

僕のすぐそばに丸くんが音もなく降り立つ。

「高町家はとうだった」

「とりあえず不振な様子はありませんでした。高町このはも管理局にも敵対するような事はなさそうです」

「そう」

管理局は確かに横暴な所も目立つけどこの世界には必要な組織だ。

それを潰すとか言ったら敵対する事確定だからね。

ロストロギアは危険な物も多いからどうしたって管理局のような組織は必要だ。

実際に管理局が力付くで奪って行ったから今も存在してる世界は少くない。

例え滅びてもそれが世界の人々の総意だと言うなら仕方ないけど一部が渡したくないって反発して何も知らない人達ごと消えた世界だつてある。

「でも、今回のジュエルシードは中身を排除しないと管理局じゃ封印しきれないから暫くは渡せないね」

「そうですね。分断されてなおあの魔力です。この世界のランクだとSSクラスですから」

「一個に付き中身が一つだからとんでもないバカ魔力だね。まあ、僕らも人のことはいえないけど」

「そうですね」

守護騎士のみんなも元の世界では若いのに英雄だったしなんだかんだで非常識の集まりだよな。

「でも、サッカーか、なにか忘れているような？」

「思いだせないのなら大したことじゃないんじゃないですか？」

「そうかな……まあいいや、とりあえず帰ろう」

忘れてた事が何なのか僕はその日の夜に知る事になった。

「っ！？ジュエルシードの気配だ」

「今までより大きい反応です。どうしますか？」

「そうだね。これは忘れてた僕の責任かな」

そう、忘れてたのはサッカーチームの子がジュエルシードを持っていた事だ。

「すっかり忘れてた。なのはちゃん達の魔力に吞まれて気付かなかったんだ」

僕は家を飛び出し異空間からホウキを取出し横のりして空へと飛び上がった。

「じゃあ、行ってくるね」「気をつけてください」

「ありがとう、フェイクくん」

言って僕は一気に加速して暴走現場へと向かった。

張ってあった結界はホウキごと突っ込んで突破した。

空けた穴はちゃんと補強したよ。

現場には雲にも届きそうなでっかい樹、それは周囲を破壊しつつまだ成長を続けていた。

「……まさか此処までとはね」

破壊されていく町を見つめる視界の端になのはとこのはを見つけた。
二人は襲って来る樹の根や枝から必死に逃げている。
「っと!?!」

二人に気をとられてるいると僕の方にも枝が襲いかかって来たので慌ててかわす。

「くっ、よっ、うわわっ」

周囲から次々と襲い来る枝を躲していく。

「ああもっ、鬱陶しいっ!!」

僕はその場に停止すると魔力は全方位へ放出して枝を蹴散らした。

「エアリアル・バースト!!」

このはが術を発動するとこのはの周囲を魔力の刃が竜巻の切り裂く。

「デイベイン」

このは作り出した隙になのはが杖を先端を突き出して構える。

「バスター!!」

打ち出された砲撃は巨大樹を直撃・・・しなかった。
砲撃は突如張られたシールドに防がれてしまった。

「そんな!?!」

驚きに動きを止めたなのはに向かって枝が殺到するがこのはがシ―

ルドを張って枝をはじく。

不味い明らかにジュエルシードの力は本来のものより上だ。
巨大樹の周りに魔方阵が展開される。

「攻勢術式！？」

地面から突き出た数十の根全ての先端にスフィアが形成されていく。
あんなに沢山同時に撃たれたら封鎖結界が保たないっ！？

「させないよ！！ルーン・キャンセラー！！」

巨大樹に向けて小さな魔力弾を打ち出す。
魔力弾は巨大樹のシールドに干渉して打ち消し巨大樹を直撃し魔力行使を妨害して魔法を強制的に消し去った。

「「瞬兵くんっ！？」」

どうやら三人は僕が来たことに今更気が付いたらしい。

「こんにちは、大丈夫だった？」

「ありがとう、助かったよ」

ユーノが代表するように僕に礼を言った。

「礼には及びません。あれを撃たれたら封鎖結界が吹き飛んで町が滅茶苦茶になりそうでしたから」

僕の言葉に三人はさあつと顔を青くした。

「さて魔力を打ち消したショックで動きが止まってる内に」

「ちょっと待って!!」

封印しようとした僕にをなのはが制止する。

「何、なのはお姉ちゃん？」

「中に人がいるの助けないと」

「そっか・・・じゃあ、シーリングバインド!!」

虹の鎖が巨大樹を締めあげる。

「えーと・・・あの变かな?・・・うん、やっぱりそうだ。二人共僕が中の人を助けたら攻撃して」

「分かったの」

「了解したよ」

「いくよ。ハウキ突進術超秘奥義、爆走箒超特急!!」

言いつつ僕は周囲に魔力を張り巡らし巨大樹に一気に突っ込み中にいた二人を一瞬だけ魔力を消して引っ掴みそのまま反対側に突き抜けた。

ずどおおおん!

僕が突き抜けたのほぼ同時にピンクと白の砲撃が巨大樹を直撃した。

「その力の全てで猛き力を封じよ!走れ魔法陣!輝け僕のティンクル・スター!!」

二人の砲撃で魔力が弱った隙を見逃さずに一気に封印した。

「よし、おしまいっ」と

僕は助けた二人を公園まで運んでベンチに横にしてその場を離れた。

「おいユーノ、ジュエルシードってあんなに危険なものなのか？」

「僕が知る限りではあんな事になるはずないんだけどいくらジュエルシードの力があってもただの樹が魔法を使うなんて」

「・・・あのね。その事なんだけど魔法を使ってるのはジュエルシードの中に閉じ込められている存在^{もの}なんだ」

「何それ！？僕そんな事知らないんだけど！？」

どうも本気で驚いているみたいだ。

「知らなかったんだ」

「うん」

「分かった。そこら辺も後で話そう。今日は遅いし明日・・・またこの公園で、四時ぐらいに」

「四時だね。分かったよなのはとユーノもそれでいいか？」

「うん」

「それで大丈夫だよ。じゃあまた明日なの」

「ん、またね」

さて明日はどこまで話そうかな？

瞬兵「芹沢瞬兵くんのあとがきコーナー！さて、本日のゲストは星

屑の魔導書、守護騎士、レオスくんです」

レオス「レオスルート・グリーンフィールドだ。よろしく頼むな」

瞬兵「……………」

レオス「瞬兵……無言は怖いんだが」

瞬兵「駄目作者め二ヶ月も放置してくれて」

レオス「ま、まあまあ落ち着け。作者も忙しかったんだ。一応社会人だからな」瞬兵「でもさ、それじゃいつまでたっても守護騎士のみんなが活躍できないよ」レオス「う……」

瞬兵「特にレオスくんと大山くんなんて登場シーン以外名前しか出てないし」

レオス「……そうなんだけどな」

瞬兵「うん、決めた」

レオス「何をだ」

瞬兵「また、おはなししてくる」

レオス「……………いつてらっしやいませ（すまん、俺には止められない）というわけで時間がかかって本当にすまん、こんな作者だが見捨てないでくれ、次回も頼む」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2218m/>

魔法少女リリカルなのは 星屑の魔導書

2010年10月10日20時53分発行